



(有)フットリフォーム代表
森田 茂

今年もモンゴルボランティア活動して来ました!

2006年8月12日17:00、JALチャーター機にて、沖縄や東京在住の有志6名が関西空港からモンゴルへ向け、ボランティア活動のため飛び発った。

有志の中には日本鍼灸マッサージ新聞柔道整復版にDSIS療法(足底板療法)について連載中の佐々木克則氏も参加している。私を含む6名はNPO法人オーソティックソサエティーの会員で、全員が足底板療法をマスターしており、現地で足底板を大量に作成することが可能であると期待大である。

今回も靴100足(株)ディモコシステム様より寄付)、足底板の材料数百足分、テーピングテープ(株)日東メディカル様より提供)、湿布800枚、膝サポーター100枚、フットプリント百数十足分を持参。1人当たりの荷物重量が、無料手荷物の重量限度20kgを大幅にオーバーするため、ボランティア活動のための渡航である旨をJALへ事前申請し、重量オーバー分のチャージをクリア。4時間30分後にはチンギスハン国際空港に到着し、首都ウランバートルのホテルへ直行した。

翌13日 朝食後モンゴル国第2の都市ダルハン市へ移動。ちなみに首都ウランバートル市は遊牧民が定住しはじめたため人口が120~130万人に達しているが、ダルハン市の人口は9万人と、第2の都市の割には少ない。日本のように整備されていない道路を、4時間ほど車で揺られダルハン市へ到着。とても綺麗な町である。

14日朝、ダルハン市立病院へ行き院長に挨拶し、2組に分かれて活動開始。当日は、我々がダルハン市立病院で活動することを院長がラジオ、チラシで事前にアナウンスしてくれていたため、診察室前の廊下には患者さん達が溢れていた。



廊下にはたくさんの患者さんが溢れていた

1番最初の患者さんは我々の到着より3時間前から待合室で待っていてくれた。予算が無いので3人に1人の通訳が付き、問診、フットプリンターで足形採取、メジャーとフットゲージにて足の採寸などを行う。日本語だけで患者さんに対応していた猛者もいたが、お互いの意思は不思議と通じていた!? どうやら国境を越えたボランティア活動に言葉は必要ないようだ。相変わらずこの国は先天性股関節脱臼が多い! その他には日本と同じく変形性膝関節症が多い。この日は19時まで(病院は18時で終了)127人を治療、内82人の足の足長・足幅・足囲(荷重位、非荷重位)を計測した。



下肢に変形がある少年

今回のメンバーは6度目の私以外は皆、初参加であるが、1時間もすれば要領も分り、初参加と思えないほど積極的に動いていた。

15日朝、8時30分ダルハン市立病院に到着。15時まで87人を治療。終了後、約4時間かけてウランバートル市へ戻る。モンゴルの夜空はすごくきれいで星が沢山見え、北斗七星も30分ぐらい先にあるかの様に大きく見える。

16日 活動場所をウランバートル市のモンゴル鉄道中央病院に移し、治療および計測をする。この病院は一昨年にも活動したところである。

18日 この日の活動場所はウランバートル第63特別学校。ここは貧困層の子供や障害を持つ子供たちが通う学校で、ここも一昨年訪れて活動を行った場所である。貧しい家庭には国からの援



ウランバートル市の街並み。マンションが増え、車の数も多い

助はあるもののおそらく数万円程度であるため、家の電気や水道が止められたりするらしい。日本では考えられない。

ここで印象的な1人の少年と出会った。16歳のこの少年には兄2人がいて3人兄弟。2人の兄は知的障害を持っており、兄弟は両親には捨てられ(モンゴルでは珍しいことではなく平気で自分の子供を捨てるそうだ)、83歳のおばあちゃんと兄弟の4人暮らし。16歳の少年が生計を担っている。少年は左右とも先天性股関節脱臼で医師の勤めで手術を受けたが、逆に症状が悪化し仕事もままならないと訴えていた。股関節に屈曲制限があり、椅子に普通に座することもできない状態である。16歳といえば日本なら高校1、2年生で勉強やスポーツに励んでいる年ごろである。しかし、この少年は一家の生計を担い、しかも医療過誤ときている。踏んだり蹴ったりである。我々有志で話し合い、日本にレントゲン写真(術前術後)を送ってもらい医師に判断を依頼し、再手術が可能であれば募金を集め少年を日本に呼ぼうということになった。この紙面を読んでくださった方にも募金をお願いしたいと思いますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

モンゴルに行くたびに思うのだが、日本の景気が悪いといっても、今時穴の開いた靴を履いている子供を見ることはない。我々の業界の景気も厳しくなってきたが、自分の子供は塾に通わせて教育を受けさせ、綺麗な服を着せ、食べ物にも気を使い、おまけにペットまで飼っている、日本はまさに黄金の国である。モンゴルでは道端で物乞いする少年にも何度か出くわしたが、日本ではまず遭遇しないであろう。モンゴルのような国が世界には沢山あるだろう。日々の施術の中でモンゴルの人々の生活を思い出し、常に自分は幸せであることを忘れずにこれからも活動が続けたいしていきたいと思う。



靴底に穴が開いている

最後にこの紙面をお借りして、寄付していただいた方や材料などを提供してくださったメーカーにお礼申し上げます。バイラー!! (ありがとうございました)

参加した有志

- 佐々木 克則氏 (KSケアワーク代表・PT)
- 押川 孝一氏 (広島県 押川鍼灸整骨院々長)
- 佐渡山 勝美氏 (沖縄県 池原整骨院々長)
- 石田 光江氏 (丸手印靴工房代表)
- 平谷 真美氏 (クツつくり屋one代表)



ダルハン市立病院前にて。左から森田、院長、佐々木氏、佐渡山氏、押川氏、石田氏、平谷氏

モンゴルボランティア活動のための寄付を募っています。ご協力をお願いいたします。
寄付の振込み先
ぱるる 00970-0-175225
日本モンゴル東洋医療交流会
問い合わせ TEL 072-251-2310



火傷をして2年間、この状態の女性